台大日本語文研究第 18 期
2009 年 12 月，頁 187-206
2009-07-31 收稿，2009-10-06 通過刊登

日語漢文訓讀的重要性及其訓讀法

王廸*

摘要

日語裡除了現代口語文體與文語文體之外，還有漢文訓讀文體。日語的漢文訓讀文是日語解讀漢文的一種文體，但又不同於原來的漢文，應說是日語，是按照日語文法來解讀漢文的一種日語文語譯文。漢文訓讀文源於奈良・平安時代，迄今欲研究日本的語言乃至歷史、文化、文學等都必須了解此種文體。漢文訓讀有一定的文法規則，它不像古語隨時代而逐漸消失，其文法規則反而隨時代的演進而更臻完備。現代日語不能說是與此種文體完全無關。例如日人經常朗朗上口的「虎穴に入らずんば、虎児を得ず（不入虎穴焉得虎子）」、「過ぎたるはなほ及ばざるが如し（過猶不及）」、「備へあれば患ひなし（有備無患）」、「覆水盆に返らず（覆水難收）」等等，這些都引自中國的古典，且都已溶入日本的言語文化中，甚至有些已成爲日語中的諺語，因此要深入了解日本人的言語文化，就不能忽視日語漢文訓讀文體。

關鍵字：日語、漢文訓讀、漢文學、音讀、訓讀

* 開南大學應用日語學系助理教授

The importance of the pronouncing Chinese classics in the Japanese way and the method in Japanese

Wang, Ti*

Abstract

The Japanese writing style has “Chinese writing Japanese reading sentence” besides “Colloquialism sentence of present age” and “Composition written in literary style”. “Chinese writing Japanese reading sentence”was invented to read Chinese classics, it is different from the original Chinese classics. This is a Japanese written language translated sentence along the Japanese grammar. There is the source of the pronouncing Chinese classics in the Japanese way in the Nara / Heian era. We must understand "a pronouncing Chinese classics in the Japanese way sentence" by all means to study the Japanese language and history, culture, literature. Pronouncing Chinese classics in the Japanese way has a law. It does not become extinct along the times like an archaic word. On the contrary, with the development of the times, it was completely equipped still more. It cannot be said that the modern Japanese is unrelated to "a pronouncing Chinese classics in the Japanese way sentence". For example,” Nothing venture, nothing win(虎穴に入らずんば、虎児を得ず)”,” Too much spoils, too little is nothing(過ぎたるはなほ及ばざるが如し)”,” Providing is preventing.(備へあれば患ひなし)”, “It is no use crying over spilt milk. (覆水盆に返らず)” are quoatations from Chinese classics, these will be connected with Chinese classics.Besides, these melt into Japanese language culture, and there are a lot of things which have already become the Japanese proverb.

* Assistant Professor, KaiNan University

Therefore, if we will understand Japanese language culture deeply ,we should not ignore pronouncing Chinese classics in the Japanese way.

Keywords: Japanese, Chinese writing Japanese reading sentence, Chinese writing study, Phonetic reading, Japanese reading

日本語における漢文訓読の重要性、並びにその方法について

王廸*

要旨

日本語の文体には、「現代口語文」と「文語文」の外に、「漢文訓読文」がある。日本語の漢文訓読は漢文を読むために考え出されたもので、元の漢文とは異なり、日本語文法に沿った日本語文語訳文なのである。漢文訓読の源は奈良・平安時代にある。日本の言語や歴史、文化、文学などを研究するには、どうしても「漢文訓読文」を理解しなければならない。漢文訓読には法則があり、古語のように時代に随って消失するのではなく、逆に時代の進展に伴って、いっそう完備して来た。現代日本語も「漢文訓読文」と無関係とはいえない。例えば、日本人が常に口にしている「虎穴に入らずんば、虎児を得ず（不入虎穴焉得虎子）」、「過ぎたるはなほ及ばざるが如し（過猶不及）」、「備へあれば患ひなし（有備無患）」、「覆水盆に返らず（覆水難收）」などは中国の古典からの引用であり、しかも、日本の言語文化に溶け込み、中には既に日本の諺になっているものも少なくない。従って、日本の言語文化を深く理解しようとするのであれば、漢文訓読を蔑ろにしてはならないのである。

キーワード：日本語、漢文訓読、漢文学、音読み、訓読み

* 開南大学応用日本語学科助理教授

日本語における漢文訓読の重要性、並びにその方法について

一、はじめに

日本語の文体には、「現代口語文」と「文語文」の外に、「漢文訓読文」がある。「漢文訓読文」は「訓読文」と「書下し文」の二つに分けられる。このことはすでに拙稿「日本における漢文訓読の基礎論」において詳しく説明したが[1]、今回、再び日本語における漢文訓読を取り上げたのは、漢文訓読はあくまで日本語であり、国語学に属するものだからである。

言語は学問研究の手段や道具であるとよく言われるが、日本に関する学問は現代口語だけではカバーしきれないところがある。古代から中世、近世を経て、明治・大正・昭和に至るまで、日本漢文を無視して、日本の文学・文化・思想・言語を論ずることは不可能なのである。このことからも、漢文訓読が日本語において占める重要性が分かるであろう。

二、国語学に属する漢文訓読

漢文訓読の起源は平安時代から、もしくは奈良時代にその芽生えがあったと言われている。漢籍が日本に伝えられた状況について、『古事記』は、次のように述べている。

> 百濟國主照古王以牡馬壹疋、牝馬壹疋付阿知吉師以貢上［此阿知吉師者阿直史等之祖］。亦貢上横刀及大鏡。又科賜百濟、若有賢人者貢上。故受命以貢上人名和迩吉師。即論語十卷·千字文一卷并十一卷、付是人即貢進［此和尓吉師者文首等祖］。
>
> （百濟國主照古王、以牡馬壹疋、牝馬壹疋を阿知吉師に付けて以ちて貢上せり［此の阿知吉師は阿直の史等の祖］。亦、横刀及び大鏡も

[1] 王廸：「日本語における漢文訓読の基礎論」『南台應用日語學報』第 8 号（台南：南台科技大学応用日語系、2008 年 12 月）頁 75。
「訓読文」は文章を崩さず、「漢語」と日本語の語順が異なる場合、漢文原文の語彙の後に、助詞・助動詞・活用語尾を付けて読むことで、「書下し文」はその訓読文を日本語に直した文である。（筆者訳）

> 貢上す。又、百濟に科せ賜く、「若し賢しき人有らば貢上せよ。」と、故、命を受けて貢上せし人の名は和迩吉師。即ち、論語十巻·千字文一巻、并せて十一巻を、是の人に付けて即ち貢進せり［此の和尓吉師は文の首等の祖］。）[2]

当時齎された漢籍は『論語』十巻、『千字文』一巻の併せて十一巻あった。これらは日本に伝えられた最古の漢籍といわれている。また、『日本書紀』では、応神天皇 16 年（348）に百済の昭古王が彼の臣下阿直岐を日本に派遣したと記し、阿直岐によって王仁が来日し、皇太子の師となったと記載している[3]。

以上から分かるように、皇太子は朝鮮の百済の王仁について漢籍を学んだが、どのようにして漢籍を学んだかは明らかでない。しかし、時代が降って奈良時代になると、遣隋使の派遣によって、中国文化全般を吸収し、漢字を日本語に取り入れたことは周知の事実である。『日本語の歴史』にも次のように述べられている。

> 日本語の書き言葉の歴史は、奈良時代に他国の文字である漢字とめぐりあい、日本語を必死になって漢字で書き表そうとしたところから始まります。[4]

つまり、漢字の音を借りて日本語を漢字で表そうとしたのである。これが即ち「万葉仮名」で、これによって書かれた代表的な作品が『万葉集』である。この万葉仮名が日本語を表記する原型で、後の時代の「カタカナ」や「ひらがな」は、ここから派生した。実際、漢字で表された万葉仮名は、ほとんど訓読みである大和言葉なので、日本の国語学の範疇に属している。

---

[2] 神田秀夫・太田善麿校注：『古事記』（下）（日本古典全書）（東京：朝日新聞社、昭和 37 年（1962））頁 177-178。

[3] 武田祐吉校註：『日本書紀』三（日本古典全書）（東京：朝日初版、昭和 31 年（1956）4 月 2 版）頁 22。
十五年秋八月、壬戌朔丁卯、百濟王遣阿直岐、貢良馬二匹、即養於輕阪上廄、因以阿直岐令掌飼、故號其養馬之處、曰廄阪也、阿直岐亦能讀經典、及太子菟道稚郎子師焉、於是天皇問阿直岐曰、如勝汝博士亦有耶、對曰、有王仁者、是秀也、時遣上毛野君祖、荒田別、巫別、於百濟、仍徵王仁也、其阿直岐者、阿直岐史之始祖也、十六年春二月、王仁來之、則太子菟道稚郎子師之、習諸典籍於王仁、莫不通達、故所謂王仁者、 是書首等始祖也。

[4] 山口仲美：『日本語の歴史』（東京：岩波書店、2006 年 5 月 1 刷、2009 年 2 月 9 刷）頁 7。

「漢文訓読文」は漢文を日本語で解読した文体であり、漢文訓読を文章化したものを「書下し文」という。「漢文訓読文」や「書下し文」は「文語文」であるが、現代日本語は「口語文」である。しかし、これらが現代日本の言語文化と全く無関係であるとは言えない。その詳細は既に拙稿「日本語における漢文訓読の基礎論」において述べたので[5]、そちらを参照していただきたい。

「漢文訓読文」や「書下し文」は元の漢文と異なり、日本語であるから、外国語のジャンルに属しないで、国語学に属している。日本の中学校や高校では、国語の授業で漢文を教える。佐藤利行はこのことについて、詳しく説明している[6]。彼はまた次のようにも述べている。

> この他にも日本漢文（日本人が作った漢文作品）として、夏目漱石の漢詩や森鴎外の漢文で書かれた日記なども教材として用いられています。
>
> これを見ても、いかに漢文が日本の言語活動のなかに溶け込んでいるかということが理解できると思います。[7]

つまり、国語の授業には中国の漢文以外、日本の文学者の漢文作品なども教材として用いられていると述べ、また漢文が日本の言語活動の中に溶け込んでいると説いている。日本の言語活動を問題にするには漢文を無視してはならないのである。

三、漢文訓読の重要性

漢文や日本漢文は日本の国語学のジャンルに置かれているということは、古来、日本人が漢文を自国の言語文体の一つと認めてきたということを示している。確かに、漢字や漢文を除いて日本語を語

---

[5] 同註 1、頁 73。例えば、現代日本人が常に口にしている「人事を尽くして、天命を待つ」は「自分の能力を精一杯果たして、その後は運に任せること」を意味している。即ち、中国人のいう「盡人事，聽天命」である。又、「備えあれば患ひなし」は「万全の用意をしておけば、心配することはない」という意味で、中国文では「有備無患」なのである。（筆者訳）

[6] 佐藤利行：「漢文訓読の歴史及び翻訳の意義」『漢文教育』27 号（広島：中国中世文学会／広島漢文教育研究会、2002 年 11 月）頁 82。

[7] 同註 6、頁 82。

ることができないことは自明である。日本語学者、林史典は次のように述べている。

> 日本では漢文が訓読され、したがって中国の古典は、昔から訓読文によって広く親しまれてきた。無駄を排し、情緒を抑えた、簡潔で緊張のある訓読体は、そのまま日本古典の重要な文体であると同時に、現在の日本語にも後述のような大きな影響を与えている。[8]

つまり、日本では、昔から中国の古典は「訓読文」によって広く親しまれてきた。「訓読文」はそのまま日本古典の重要な文体であると同時に現代の日本語にも影響を与えているというのである。また、彼は「漢字を借用した言語にあって訓読みや訓読という方法を生み出したのは日本語だけである」と述べている[9]。要するに、漢字や訓読文は昔から日本の古典であるほど日本人の教養として重要な文体であり、日本語の言語形成に当たって、無視できない役割を担っているのである。

日本の古典を巡ってみれば、漢字や漢文とのかかわりが一層浮かび上がってくるのである。

表一　日本古典一覧

古典書名	成立時期	文体	備考
『古事記』	奈良時代	変体漢文／万葉仮名	和銅 5 年（712）
『播磨風土記』	奈良時代初期	変体漢文／万葉仮名	和銅 6 年～霊亀元年（713～715）の行政組織記事などある
『日本書紀』	養老 4 年（720）	漢文	神代～持統天皇まで

[8] 林史典：「漢文訓読の歴史」『月刊しにか 特集漢字と日本語』（東京：大修館書店、1998 年 5 月）頁 28。
[9] 同註 8、頁 29。

『懐風藻』	奈良時代	漢文	奈良時代天平勝宝 3 年（751）の序文ある
『続日本紀』	延暦 16 年（797）	漢文	
『凌雲集』	平安初期	漢文	弘仁 5 年（814）嵯峨天皇の勅命より編纂
『文華秀麗集』	平安初期	漢文	弘仁 9 年（818）嵯峨天皇の勅命より編纂
『経国集』	平安初期	漢文	天長 4 年（827）淳和天皇より勅撰漢詩文集
『日本後記』	（840 年）	漢文／変体漢文	
『続日本後紀』	貞観 11 年（869）	漢文／変体漢文	
『文徳実録』	元慶 3 年（879）	漢文／変体漢文	
『三代実録』	延喜元年（901）	漢文／変体漢文	
『延喜式』	延長 5 年（927）	漢文	
『医心方』	永観 2 年 984 年朝廷に献上	漢文	
『和漢朗詠集』	寛仁 2 年（1018）	漢文／和文	漢詩 588 首 和歌 216 首
『中右記』		変体漢文	寛治元年～保延 4（1087～年 1138）記事
『御堂関白記』	平安時代？	ほとんど漢文（2 箇所のみひらがな）	長徳 4 年～治安元年（998～1021）記事
『小右記』	平安時代？	変体漢文	天元元年から執筆

『和名抄』	平安中期	漢文／万葉仮名	万葉仮名で名詞の読みや漢籍の出典を記す
『天暦御記』	平安時代中期	変体漢文	村上天皇著
『今昔物語集』	平安末期	漢字カタカナ混じり文	
『春記』	平安時代	変体漢文	
『貞信公記』	不明	変体漢文	延喜 7 年～天暦 2 年（907～948）記事

「表一 日本古典一覧」から分かるように、日本古来の文献は「漢文」や「変体漢文」、または「万葉仮名」や「漢字カタカナ混じり文」などで綴られている。「変体漢文」は峰岸明の『変体漢文』で用いられている用語であるが[10]、山口仲美は『日本語の歴史』において「漢式和文」と称している。

> でも、「変体漢文」という名称は、最近では問題があるというので、他の呼び名が提唱されています。「和化漢文」「変体和文」「漢式和文」、少し前には、「記録体」「東鑑体」と呼ばれたこともあります。……「変体漢文」という呼び名では、中国で書かれた「漢文」の一種のように思われてしまいます。中国語文ではないのです。れっきとした日本語文です。つまり、「和文」の一種なのです。……「漢式和文」というのは、漢文様式で書いた日本語の文章の意味です。……日本語として書いた文章は、すべて「和文」と呼びます。「和文」のなかに、いま問題にしている「漢式和文」、そして、これから述べていく「万葉仮名文」「草仮名文」「ひらがな文」「宣命体文」「漢字カタカナ交じり文」が入っています。[11]

「変体漢文」という名称は誤解を呼びやすいため、「漢式和文」とすることで「和文」であることを明らかにする意図があるというの

[10] 峰岸明：『変体漢文』（東京：東京堂出版社、1986 年 5 月）。
[11] 同註 8、頁 48-50。

である。氏の言うように、「和文」には「変体漢文」もしくは「漢式和文」以外にも、「宣命体文」「祝詞」などの「漢字カタカナ交じり文」があり、「万葉仮名文」から「草仮名文」を経て、そして創出された「ひらがな文」があるが、これらはいずれも漢字や漢文と関わりを持っている。

平安時代の語彙について、田中牧郎は次のように述べている。

> 平安時代の語彙は、文体的観点から、和文語、歌語、漢文訓読語、記録語の四つの系列に分けて述べられることが多いが、中でも和文語と漢文訓読語との対立が最も顕著であると考えられている。[12]

われわれに馴染みのある「和文語」「漢文訓読語」「記録語」はもちろんのこと、「歌語」も漢語と密接な関係にある。その一例を挙げてみよう。

> 神風の　伊勢の国にも　あらましを　なにしか来けむ　君もあらなくに（『万葉集』163）

ここにある「神風」は「かみかぜ」と読み、「君」は「きみ」と読むが、いすれも漢字で綴られている。平安時代の語彙の全ては漢文訓読の影響を受けていると言わざるをえないのである。

佐藤武義は漢文訓読語の国語の文章に対する影響について、次のように述べている。

> 平安時代の文芸作品は、漢詩文や説話の類を除き、他の多くは仮名文で書かれているが、当時の公式の場で専ら漢文が使用されているために、漢文訓読に特有な用語が仮名文の中に紛れ込んでいる場合がある。[13]

漢文は公式の場で使われたため、仮名文の中にも漢文訓読の用語がある、すなわち、「仮名文」は「漢文訓読文」に影響を受けているといい、従って、漢文訓読語が勢力を得ようになるのも当然なこと

---

[12] 田中牧郎：「平安和文の中の漢文訓読語をめぐって―「訓点特有語」とされる動詞の一考察―」『学苑』通号 692（東京：昭和女子大学、1990 年 1 月）頁 145。

[13] 佐藤武義：「漢文訓読語の国語の文章に対する影響―「クシテ」と「クテ」との比較を中心に―」『国語学』通号 68（東京：日本語学会、1967 年 3 月）頁 59。

だという。これは、単に佐藤の考えであるに止まらず、現代の日本語学者の常識だとも言える。当時、漢文は知識人の教養でもあり、その象徴でもあったからである。

「カタカナ」も「ひらがな」もその起源は漢文訓読の場にある。このことについて、山口仲美は次のように述べている。

> カタカナが、漢文訓読の世界から発生してきたことはすでに述べました。その同じ場でひらがなも発生しているのです。漢文を訓読するときに、助詞・助動詞、活用語尾、振り仮名などを万葉仮名の一部をとったカタカナで記し始めた頃、万葉仮名全体を崩し書きしたひらがなも使っています。[14]

つまり、「カタカナ」も「ひらがな」も、その発生は漢文訓読がきっかけだったのである。

奈良時代に漢籍を読もうとして発生し、平安時代以降、発達して来た漢文訓読や漢文文化は、更に鎌倉時代を経て、室町時代に五山文学にまで発展し、五山文化の特色の一つを形成した。五山禅僧、例えば、義堂周信の『空華集』・絶海中津の『蕉堅稿』・瑞渓周鳳の『臥雲藁』などの作品がそれである[15]。そして、江戸時代になると、漢文の教養は、なおさら重視されるようになった。漢文学者が互いに訓点研究を磨き合い、漢文訓読の技法は、いっそう完備し、今日に繋がっているのである。加藤徹が言うように「私たちが見慣れているスタイルの漢文訓読が普及したのは、江戸時代からである」[16]。彼は次のようにも述べている。

> 中国や朝鮮では、近世に入ると、漢文は民衆と引き離された。その逆の道を歩んだのが、江戸時代の日本だった。日本の漢文訓読は、文語であった。口語より難しかったが、それでも日本

[14] 同註 4、頁 77。
[15] 五山禅僧の作品に関しては、拙稿「『東海瑤華集』における老荘的特色」及び「五山僧の禅詩に見る老荘的表現」が参考になる。王廸：「『東海瑤華集』における老荘的特色」『お茶の水女子大学中国文学会報』18 号（東京：お茶の水女子大学中国文学会、1999 年 4 月）。王廸：「五山僧の禅詩に見る老荘的表現」『国士舘大学教養論集』52 号（東京：国士舘大学、2002 年 3 月）。
[16] 加藤徹：「明治維新を可能にした日本独自の漢文訓読文化」『特集 知的生活への誘い 中国古典の叡智に学ぶ』123（6）通号 1490（東京：中央公論社 2008 年 6 月）頁 203。

語の一種である[17]。

このように、加藤徹も他の日本語学者と同じように、漢文訓読は日本語の一種であると認めている。彼はかつて夏目漱石の俳句「時鳥厠　半ばに出かねたり」を取り上げて、それが『酉陽雑俎』『太平広記』などの漢籍を承けており、従って、漢文の知識がなければ、百年前の日本文学を正確に読むことさえできないことを明らかにした。そして、彼は、更に次のように述べている。

> 個別の知識だけではない。そもそも「漢文」とは何か、という根本的な視座をおさえておかないと、日本文化の本質についても見誤ることになる。[18]

既述したように、近代の日本文学者は漢学に関する高度な教養の持ち主でもあった[19]。日本文化を問題にするには、中国の漢文文化を抜きにしてはならないのである。

この他、現代日本語にも、漢文訓読の表現は残っている。例えば、「やむを得ず」は「不得已」の訓読であり、「せざるを得ない」は「不得不」の訓読である。このように漢文訓読が現代まで残って使用されている例は少なくない。古田島洋介は上掲の二つの表現以外にも、漢文訓読と現代語との繋がりを幾つかの例を挙げて説明している。その例を参考のため下に挙げておく。

(1)「なかんづく」は「就中」の訓読「中に就く」が音便したものである。

(2)「駅で待つこと二十分、やっと友だちがやってきた」

(3)「独走すること三キロ、あと一息でゴールが見える地点にさしかかった」

(2)と(3)は、「Ｖ＋時間／距離」の訓法「～すること……」であるが、古田島洋介は「一つの型として日本語に応用された例なの

---

[17] 同註 16、頁 206。
[18] 同註 16、頁 199。
[19] 同註 1、頁 75。近代に至っては、有名な文学者はすべて高度な漢学教養を持っていた。例えば、周知の如く、夏目漱石・芥川龍之介などがそうである。上述のように、漢学を無視したら、日本文学・文化・思想ないし日本語をより深く研究することができないのである。(筆者訳)

だろう」と判断している[20]。

それのみならず、例えば、「虎穴に入らずんば、虎児を得ず（不入虎穴焉得虎子）」、「過ぎたるはなほ及ばざるが如し（過猶不及）」、「備えあれば患ひなし（有備無患）」、「覆水盆に返らず（覆水難收）」、「人事を尽くして、天命を待つ（盡人事，聽天命）」などは、中国の古典から日本語の諺になったものである。

以上、述べてきたように、漢文訓読は、もともと「漢文」を理解するために生み出されたものであるが、日本語文体の一つになってしまい、後世まで引き継がれ、今日に至っている。それは日本の歴史において中国の文明や知識の摂取に重要な役割を果たしただけでなく、文字、文体、現代日本語の言語形成まで影響を与えてきたのである。

四、基本的訓読法

漢文訓読には、漢文に助詞・助動詞・活用語尾と返り点を付け加えた「訓読」と、訓読を文章にした「書き下し文」の二つがある。このことについては、既に拙稿「日本語における漢文訓読の基礎論」において詳説した[21]。ここでは、その訓読技法を述べる。以下においては理解のため長文を避け、説明しやすい例文のみをとりあげる。

日本語は、周知のごとく、漢文と異なり、訓読みと音読みの区別があるので、漢和辞典を丹念に引くことがポイントである。更に語順の違いにも注意しなくてはならない。その理由は、日本語が膠着語であるのに対して、漢文は孤立語であるところにある。しかし、常に語順が異なるわけでもない。

そこで、その関係を明らかにするために、1.主述（主語と述語）関係、2.修飾関係、3.述目／述補（述語と目的語／補語）関係、4.否定関係などの基本構文ごとに、簡単な例を掲げてみよう（より複雑な構文については別の機会に譲り、ここでは、以上の四つの基本

[20] 古田島洋介：「現代における漢文訓読の意義」『明星大学研究紀要【日本文化学部・言語文化学科】』8 号（東京：明星大学、2000 年 3 月）頁 40-41。
[21] 同註 1，頁 76-77。

的構文に絞って、漢文訓読の基本的方法を説明する)。

1.主述関係

白文	訓読語	書下し文	現代日本語
天高	てんたかシ 天 高	天高し	天が高い
鳥啼	とりなク 鳥 啼	鳥啼く	鳥が鳴く
馬肥	うまこユ 馬 肥	馬肥ゆ	馬が肥える
水清	みずきよシ 水 清	水清し	水が清い
人在	ひとあリ 人 在	人在り	人がいる

2.修飾関係

白文	訓読語	書下し文	現代日本語
高城	たかキしろ 高 城	高き城	高い城
最良	もっとモよシ 最 良	最も良し	最も良い
大喜	おほイニよろこブ 大 喜	大いに喜ぶ	大いに喜ぶ

3.述目／述補関係

白文	訓読語	書下し文	現代日本語
飲酒	のムさけヲ 飲 酒 レ	酒を飲む	酒を飲む
勧酒	すすムさけヲ 勧 酒 レ	酒を勧む	酒を勧める
濺涙	そそグなみだヲ 濺 涙 レ	涙を濺ぐ	涙を流す
在此	あリここニ 在 此 レ	此に在り	ここにいる (述補関係)
乗馬	のルうまニ 乗 馬 レ	馬に乗る	馬に乗る (述補関係)

4.否定関係

白文	訓読語	書下し文	現代日本語
不學	不 學（ずまなバ）レ	學ばず	学ばない
不知	不 知（ずしラ）レ	知らず	知らない
非人	非 人（あらズひとニ）レ	人に非ず	人間ではない
無害	無 害（なシがい）レ	害無し	害がない

次に、様々な典籍から、上掲のものよりも長い文を取り上げて、「白文」「文の構造」「書下し文」の三つを示してみよう。

（1）中国の漢詩

國破山河在　國 破　山河 在　國破れて山河在り
　　主述関係　主述関係
城春草木深　城 春　草木 深　城春にして草木深し
　　主述関係　主述関係　（杜甫「春望」）

（2）聖徳太子の「憲法十七条」

以和為貴　以和　為貴　和を以て貴しと為す（第一条）
　　述目関係　述目関係
天覆地載　天覆　地載　天覆ひ地載す（第三条）
　　主述関係　主述関係
國非二君　國　非 二君　國に二君非ず（第十二条）
　　否定関係
　　主　述関係
民無両主　民　無 両主　民に両主無し（第十二条）
　　否定関係
　　主　述関係

小事是輕　小事　是　輕　小事是れ輕し（第十七条）

主述関係

主　述関係

（3）『懐風藻』

閲古人之遺跡　閲　古人之遺跡　古人の遺跡を閲（み）る（懐風藻序）

述目関係

道徳承天訓　道徳　承　天訓　道徳天訓を承（う）く（『懐風藻』大友皇子「述懐」）

述目関係

主　述関係

（4）『五山文学集』

遠岫含殘雪　遠　岫（えんしゅう）　含（ふくム）　殘雪（ざんせつヲ）　遠岫殘雪を含（えんしゅうざんせつ）む（江西龍派『續翠詩集』「扇面」）

述目関係

主　述関係

夕雨響清秋　夕雨　響　清秋　夕雨清秋に響（せきう）く（惟忠通恕『雲壑猿吟』「寄遠友」）

述補關係

主　述關係

（5）『羅山林先生文集』

我朝神國也　我朝　神國也　我が朝（わ）神国（ちょうしんこく）なり（巻 66）

主　述関係

山中之花在書中　山中之花　在　書中　山中（さんちゅう）の花書中（しょちゅう）に在（あ）り（巻 75）

述補関係

主　述関係

書中有玉女　書中　有　玉女　書中に玉女（ぎょくじょ）あり（巻 75）

述目関係

主　述関係

（6）夏目漱石の詩文

疎竹不蔵秋　疎竹　不　蔵秋　疎竹秋を蔵（かく）さず（夏目漱石「無題」）

述目関係

否定　関係

主　述関係

南窓無一事　　南窓　無　一事　　南窓に一事無し

否定関係　　（夏目漱石「題自画」）

主　　述関係

これらによって知られるように、漢文のすべてが日本語の語順と異なるのではない。「主述関係」と「修飾関係」では語順は変わらないが、「述目／述補関係」と「否定関係」では語順が変わるのである。これは現代日本語においても同様である。従って、正確に訓読するためには、漢文の「主語」「述語」「修飾」「否定」などの関係をしっかりと理解しなくてはならないのである。

「述目／述補関係」と「否定関係」の場合、訓読では、「返り点」を付けて語順を変えて読まなくてはならない。これを「返読」と言う。「述目／述補関係」や「否定関係」は前後とも一文字の場合は「レ」点を付ける。上掲の 3 と 4 がそうである。二文字以上は「一・二」点を付け、更に返るべきものがある場合は、「一・二・三」点を付け、それ以上の場合は「上・下」、または「上・中・下」を付けるのである。ここでは、「一・二」点の法則を参考のため示して置く。

法則	「述目／述補関係」	「否定関係」
① A　B C	有　天地　／乗　白馬	無　意義
	二　一　二　一　二　一	二　一
② A－B　C D	鍛－煉　身體　／　回－歸　自然	╳
	二　一　二　一　二　一	

五、おわりに

漢文訓読は、日本語を形成する一つの重要な要素である。その文体には、「訓読文」と「書下し文」の二つがある。漢文訓読の歴史は平安時代にまで遡り、その萌芽は奈良時代に求めることができる。それは中国の文明や知識を摂取するために生み出されたものであった。

日本の古典のほとんどは「漢文体」「漢文訓読体」「漢式和文体」な

ど漢字や漢文とかかわりのある文体で綴られており、日本の歴史、文学、言語など、日本文化を語るには、漢文訓読に関する知識は不可欠である。また、漢文訓読は、幕末明治期のヨーロッパの新文明の受容に当たっても大きな役割を果たした。石塚晴通は「日本語表現の原動力としての漢文訓読」において、これについて詳論した上で[22]、最も日本的と思われている文章表現にも漢文訓読に基づいているものがあり、新しい日本語表現を造り出す原動力として漢文訓読を捉え直す必要があると論じている。漢文訓読は古代や中世、近世のみならず、現代日本語においても重要な位置を占めているのである。

本稿では、漢文訓読について、その基本的方法の解説を試みた。すなわち、訓読する場合、漢文と訓読とでは語順が常に異なるわけではなく、「主述関係」「修飾関係」「述目／述補関係」と「否定関係」の四つの基本構文の中で、「述目／述補関係」と「否定関係」の場合のみ語順が変わるから、漢文の「主語」「述語」「修飾」「否定」などの関係をしっかりと把握すれば、正確な訓読を施すことができることを明らかにした。

参考文献

石塚晴通(2005)公開講演　日本語表現の原動力としての漢文訓読(第六回国際日本語学シンポジュウム「比較日本学の試み」(報告))『比較日本学研究センター研究年報』創刊号、東京：お茶の水女子大学。

王廸（2008）「日本語における漢文訓読の基礎論」『南台應用日語學報』第 8 号、台南：南台科技大學應用日語系。

王廸（1999）「『東海璚華集』における老荘的特色」『お茶の水女子大学中国文学会報』18 号、東京：お茶の水女子大学。

[22] 例えば、「心配」は「ココロヲクバル」に基づいて、「改札」は「フダヲアラタム」に基づいて造りだされ、「完走」「皆勤」「直行」の如く中文としては語になり難いものも一語として造り出す原動力は「訓読」であった。石塚晴通：公開講演　日本語表現の原動力としての漢文訓読（第 6 回国際日本語学シンポジュウム「比較日本学の試み」(報告))『比較日本学研究センター研究年報』創刊号（東京：お茶の水女子大学、2005 年 3 月）頁 79。

王廸（2002）「五山僧の禅詩に見る老荘的表現」『国士舘大学教養論集』52 号、東京：国士舘大学。

加藤徹（2008）「明治維新を可能にした日本独自の漢文訓読文化」『特集 知的生活への誘い中国古典の叡智に学ぶ』123（6）通号 1490、東京：中央公論社。

神田秀夫・太田善麿校注（1962 年）『古事記』（下）（日本古典全書）東京：朝日新聞社

佐藤武義（1967）「漢文訓読語の国語の文章に対する影響―「クシテ」と「クテ」との比較を中心に―」『国語学』通号 68、東京：日本語学会。

佐藤利行（2002）「漢文訓読の歴史及び翻訳の意義」『漢文教育』27 号 中国中世文学会／広島漢文教育研究会、広島：広島大学

武田祐吉校註（1956）『日本書紀』三（日本古典全書）東京：朝日新聞社。

田中牧郎（1990）「平安和文の中の漢文訓読語をめぐって―「訓点特有語」とされる動詞の一考察―」『学苑』通号 692、東京：昭和女子大学。

林史典（1998）「漢文訓読の歴史」『月刊しにか 特集漢字と日本語』東京：大修館書店。

古田島洋介（2000）「現代における漢文訓読の意義」『明星大学研究紀要【日本文化学部・言語文化学科】』8 号、東京：明星大学。

峰岸明（1986）『変体漢文』東京：東京堂出版社。

山口仲美（2009）『日本語の歴史』東京：岩波書店。